熊日1971.03.06

城南特集

近く終止符を打つ

カーバイド工場

水俣市の歴史の中に

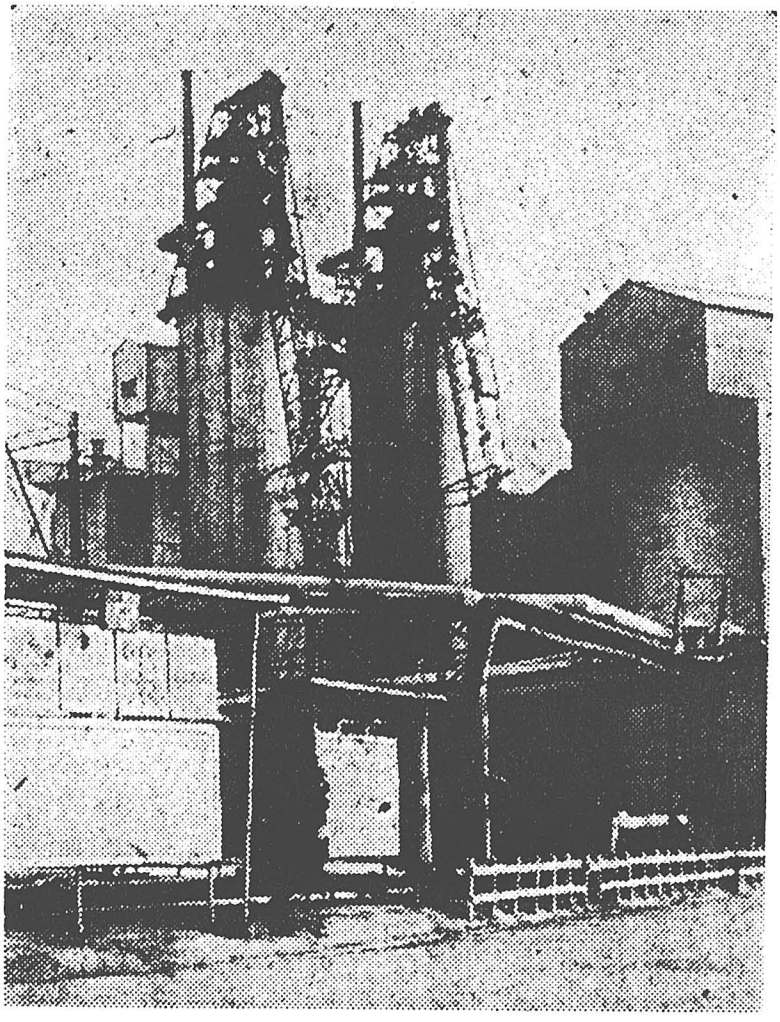
水俣市の歴史そのものといわれるチッソのカーバイド工場が、やがて止まる。わが国で初めて化学肥料の製造を始めたのもこの工場からであり、化学工業のパイロットでもあった。市民の中には、この工場に親子三代も働いたという人たちもいる。やはりいちまつの寂しさが残る。

初代社長野口遵が明治四十一年、豊富な水力電気と石灰石の産地に目をつけて、水俣にカーバイド工場を建設したのがチッソ（当時日窒）の始まり。そして同四十二年にはフランク・カロー式というカーバイドを原料として、空気中の窒素を吸収化合させる石灰窒素の肥料工場に発展させた。これがわが国における化学肥料のうぶ声。硫安は同社延岡工場（現旭化成）が最初。

鹿児島、熊本両県下に大正年間たて続けに水力発電所を建設。この安価な電気を原料として、カーバイド法によるアセチレン工業を築いた。製品は塩化ビニール、高度化成肥料を代表格としているが、塩化ビニールも戦前、同社の技術で開発し、戦後、各社がそれに続いた。

この意味からも、カーバイド工場を除いて水俣工場は考えられなかったものである。戦前は五つの炉があり、いずれも効率の悪いアーク炉だったが、戦後三十三年に一、二号炉を密閉炉にした。この密閉炉一つで、五つの炉と対抗するもので、わが国屈指の炉としてチッソ自慢の炉だった。ここに働いていた人たちの思い出はつきない。戦時中、爆撃で工場の屋根が吹き飛ばされたことや、炉から出る高熱の溶融物を直径五十㍍ほどのナベに長いサオをさしてかついだことなど。

この炉全部が、三月半ばに停止する（一部はすでにシリコン製造に振り向けられた）。原料はカーバイドから石油に切り替えられる。多くの労働者、技術者たちが、最後の火を見て、長い工場の歴史を思い起こすに違いない。



生産が止まるチッソ水俣のシンボルだったカーバイド炉